

# 麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 教授

氏名 菊水健史

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

# 1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

動物人間関係学：動物人間関係学は、動物応用科学全般の基盤ともいべき学問である。イヌなどの伴侶動物やヒトの生活を支える家畜動物、それら動物たちとヒトとの関わり方について歴史的背景とともに理解できるように工夫する。さらにその動物種ごとの生理的ならびに行動的特性を学習し、適切な動物との関係性のあり方について考察できるように学生に自主的に学んでもらう。今年度も動物との個人的な過去を振り返り、その中でもった疑問を文章化し、その間を深める作業を取り入れ、アクティブラーニングの要素を増やした。また最終レポート内に自分の想像するヒトと動物の共生のあり方をイラストにしてもらい、絵→文、文→絵と操作することを、『媒体変化』を取り入れた。

介在動物論：ヒトと動物の共生は互恵的關係を構築してきた。この一端が、医療場面などにも活かされつつある。ヒト医療場面における動物介在療法の利用対象となる個々の疾患の概要およびその治療法と介入方法の例を学ぶ機会を与える。そこから「なぜ効果があるのか」の議論の道筋を見出すための知識を、最新の論文を読み解くことで身につけ、今後のヒトと動物の共生を考察してほしい。基礎となるヒトの疾患や身体機能を紹介したのち、そこにおける動物との関わりがどのような変化をもたらすかの詳細を質問形式で講義した。今年度も動物介在療法が医療に取り入れられるかどうか、そのためには何が必要かを、課題とし、社会的課題を言語化させた。

動物人間共生論：「動物人間共生論」は、動物応用科学全般の導入学問として位置づけている。「人と動物の関係」の歴史全般を知り、将来の展望を切り開く能力を身につける。最古の仲間（家畜）であるイヌなどの伴侶動物、ときには「有害」になる野生動物、さらにそれら動物たちとの関係を歴史とともに理解し、家畜の有用性を考え、また動物たちとのより良き共生を可能にする能力を身につけ、この先4年間の修学意欲を高めることを目指す。今年度も学生がなぜ麻布大学、なぜ動物応用にきたのかの原点を、動物学の中に見出す工夫を取り入れた。また修学が足りなかった学生には、自分の自慢による自己肯定力の向上、点数が足りなかったことの振り返りと、後期以降の取り組み、3年後の自分像を記載させ、修学キャリアの向上をはかった。

地球共生系サイエンスワーク：研究によるヒト社会、動物関連領域の発展は人類の発展に必要不可欠である。その最先端の研究を自主的に学ぶ場として提供する。本学が平成28年度に選定を受けた私立大学研究ブランディング事業「動物共生科学の創生によるヒト健康社会の実現」の研究成果を理解し、これら研究成果やそのプロセスをアクティブラーニング的に学ぶことで、自らの卒業研究や「地球共生」にどう生かしていくかを考える力を身につける。今年度は参加学生がおらず、開講しなかった。

乗馬応用実習：馬実体験を介した心身への影響を測定し、その解析方法と効果を測る科学的手法を身につける。決して技術論に落ちず、データサイエンスの素質をもって、ヒトと動物の関係性を明らかにする仕組みをいれる。興味のある乗馬を通じたデータサイエンスの修学として成功したと思う。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
いのちの共生論	動物応用科学科	必修	1	135
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	135
サイエンスリテラシーII	動物応用科学科	必修	1	135
動物人間関係学	動物応用科学科	必修	2	140
介在動物論	動物応用科学科	選択	3	90
動物介在活動・療法演習	動物応用科学科	選択	3	30
乗馬応用実習	動物応用科学科	選択	3	35
専門ゼミ	動物応用科学科	選択	4	4
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	4
卒論	動物応用科学科	必修	4	4
人と動物の関係学	獣医保健看護学科	必修	1	75
動物人間関係学特論I	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	4
動物人間関係学特論II	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	4
動物観比較文化特論	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	4
動物介在療法特論	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	4
動物共生科学特別演習 III-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物共生科学特別研究 III-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物共生科学特別演習 III-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物共生科学特別研究 III-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物応用科学特別演習 VIII-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物応用科学特別研究 VIII-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物応用科学特別演習 VIII-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物応用科学特別研究 VIII-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
動物応用科学特別研究 VIII-III	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	2	4
修論（主査）	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	2	3
修論（副査）	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	2	6
博士論文（副査）	動物応用科学専攻（博士後期課程）	選択	3	1
地球共生系サイエンスワーク	全学	選択	3	1
出る杭	全学	選択	1	10
高大接続：明星学園	全学	選択	1	11
高大接続：神奈川学園	全学	選択	1	150
高大接続：桐蔭学園	全学	選択	1	11
高大接続：北豊島学園	全学	選択	1	150

## 2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

学生の成長は、自活して社会で活躍できる能力を育てること、を目指して、必須科目でも選択科目でも自分で理論的に考えて、自分で表現することを目指した内容として取り組んだ。

## 3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

暗記科目はゼロとして、課題にて思考を深め、表現するものを付し、それを評価として行った。

### (1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

課題発見、解決に関する課題を設定し、各自調査、取りまとめて提出グループワークにて同様の課題解決に関するプレゼンテーションと討議の実施

### (2) ICTの教育活用

有

オンライン、オンデマンド、データサイエンス、統計などを実施

## 4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

上記アクティブラーニングに関する成果のうち優秀なものを全員に共有、説明し、理解度を深めつつ、動機づけの刺激に取り組んでいる

### (2) 学生の理解度の把握

A

毎回の課題提出による理解度の把握

### (3) 学生の自学自習を促す工夫

A

毎回の課題提出による自学自習の促進

**(4) 学生とのコミュニケーション**

A

授業中の個別の質疑応答の時間を設けている

**(5) 双方向授業への工夫**

A

授業中の個別の質疑応答の時間を設けている

**(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）**

該当なし

## 5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

**(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映**

授業評価アンケートの結果を踏まえ、学生の理解が難しい点を詳しく説明した

**(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題**

課題の提出内容が向上した

**(3) (2)を踏まえた次年度の取組**

今年度と同様に取り組む

## 6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組  
課題の説明をより詳しくして、低学力の学生を支援する

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組  
に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

わかりにくい点のコメントが減った

## 7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

ほぼ参加。同日参加が難しい場合は、録画を拝聴した。

## 8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

長期的目標：全学的、組織だった初年次教育、アクティブラーニングを身につける姿勢の教育が必要不可欠。それを身に着けた上で、専門教育につなげてほしい。

短期的目標：学力の低下している学生に対しての授業後のフォローアップ

## 9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

特になし